

単行本『京の宇宙学』のご紹介

北原裕一（株式会社ナノオプト・メディア）

貴重な誌面をお借りして、書籍の宣伝で失礼します。

ご紹介するのは『京の宇宙学』（DVD 付）という単行本です。「京の宇宙学」と聞いて「はて？ どこかで聞いたことがあるな」と思われた方は、すばらしい。そのとおりでして、じつは2008年4月～8月、京都大学総合博物館で同名の企画展が開催されていました。京都大学の宇宙研究すべてを紹介した、力のこもった人気の展示です。本書ははっきり申し上げて、そのタイトルをパクっています。パクっても恥ずかしくないくらい、企画展同様京都大学の宇宙研究を網羅しているということで、なにとぞお許しを。

京の宇宙学

京都大学総長 松本 紘 編著

A5判変形 並製 148 ページ

定価：本体 2850 円＋税

付録：DVD

ISBN 978-4-7649-5500-4 C3044

発行：ナノオプト・メディア

発売：近代科学社

2009年7月8日発行



本書は序章を含めて5つの章からなっています。

- 1章 京都1000年の天文学散歩
- 2章 最新太陽像と宇宙天気予報
- 3章 宇宙望遠鏡の打ち上げ方・飛ばし方
- 4章 太陽系を食べる

そしてそれらをまとめる総論として

序章 宇宙から考える力を養う

があります。それぞれ著者が異なり、リレー形式で執筆してくださりました。

序章は京都大学総長の松本紘先生の執筆です（口述筆記）。その昔、宇宙は哲学の場であった。そして現在、宇宙は理解する場から利用する場へ—

☆・単行本『京の宇宙学』のご紹介・☆

一京都大学宇宙総合学研究ユニットのフィロソフィが読み取れます。「近年は日本国全体が行き詰まりなんて言われています。でも、みんな『どうしようもない』『困った困った』って言うだけで、政治家から研究者に至るまで新しいことを生み出すような人は少ない。私はそこを打破できるのは、一つは宇宙だろうと思っています。技術はすでにあるし、哲学とも結びつき、科学ももちろんわかるし」(p.12)。4章とつながる内容ですが、今やらなくてはならない／日本がやらなくてはならない、という切実な思いが伝わります。

1章は小山勝二先生です。X線天文学がご専門の小山先生ですが、今回は陰陽師安倍一族の話を中心とした歴史のお話に重点を置いてくださいました。京都は1000年前の天体観測記録を持つ地です。『明月記』には西暦1006年の超新星爆発の記録が残っています。世界に誇るこの記録ですが、日本に記録があつてヨーロッパにないという理由の根底には、当時の東洋と欧米との宗教的な考え方の違いも垣間見られるようにも思います。清明神社から冷泉家、定家の墓、京大吉田キャンパスをつなぐ今出川通を「京の天文学街道」と呼ぼうという提案で締めくくります。清明神社から歩きたくなること請け合いです。

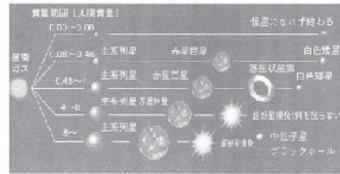


図1-1 質量別による星の一生

を江戸から京都まで行って行った人が土師門徳子です。みだつた新幹線であつたという話に行けず受けられず、当時はもうろふ歩いてです。江戸状御車間敷というのは半歩みかたなもので、その人なことを書いては困ると思つていた人が江戸の徳目刺にもたし、陰陽師にもして、四方からの事案が入つて命がけの危ぶたさまでです。

さて、まず超新星という星の話をしましょう。

星の一生は生きたらから決まっています。それは赤さによって決まるので、若い星は割合と大きく死んでゆきますが、若い星は寿命にドラマティックな展開を迎えます。これを超新星爆発と呼び、太陽の10倍以上の重さを持った星はこの超新星爆発を起すといはれます。超新星爆発は太陽質量が「4〜8」から「8」まで、超新星爆発は太陽質量に付分されます(図1-1)。太陽の4〜8倍、つまり出産的若い星は全体が極端な割合で起つて起す

2章は、太陽物理学の世界的権威、柴田一成先生です。導入が映画「天使の卵」の話でググッと読者の興味を引きつけて、コロナ、フレア、磁気リコネクション、そして宇宙天気予報へと話は進みます……あれ？ どこかで読んだことある内容だぞ？？と思われた方は、これまたすばらしい2回目。これじつは本誌「あすとろん」第3号～第6号に連載されたものなのです。修正をしました。 「なら読まない」と思うことなかれ。本書には大きな違いがあります。それは何？

はい、本文中に掲載された写真の動画が

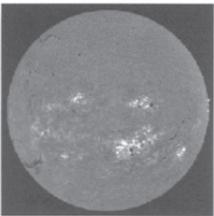


写真1-2 Fra Mauro高地の夜景(写真1-1と同じ) (全編宇宙学×文化 長瀬)

す。

別にどうもこの撮影が一部よりあるのは、海という水圏がその出す特殊なスポットを撮るのには見事なものです。海を撮ると、地球の上空の撮影とほぼ同等の明るさになります。写真1-2は写真1-1と全く同じ条件で、2008年11月に1000mmの望遠鏡で撮られた太陽の海空です。写真は1:1と比較して、非常に遠くで撮るのだから、このように、まことにきれいな撮影になっています。この撮影が起きている瞬間、よく見ると影の移動がわかります。これはほんの瞬間を捉えています。此

☆・単行本『京の宇宙学』のご紹介・☆

センター→宙空電波科学研究センター→生存圏研究所と、京都大学の宇宙研究の歴史を簡単に振り返ったあと、宇宙太陽発電所の説明です。DVDには、宇宙マイクロ送電の実験風景が収められており、その打ち合わせ風景では、若かりし頃の松本先生がカメラ目線で出演してくださっています。

さて、ここで改めて章立てを振り返ってみると、

- 1章 歴史
- 2章 最新の天体観測内容
- 3章 観測するための手段
- 4章 未来展望

と、なかなか良い流れになっていることに気づきます。よい編集がされていますね。

さらに忘れてはならないのは、DVDには特典映像があることです。衛星「ようこう」が見た太陽活動 3641 日の記録——ようこうの記録すべてを収録しました。太陽が活発に活動しているとき、元気がないとき、いろいろな表情の太陽を見ることができます。もちろん同じ表情の太陽は二度出てきません。じーっと見ていると小一時間があつという間に過ぎ去ります。

こんな単行本ですから、本体価格 2,850 円というのはお安く感じます。感じませんか？ 感じてください。何卒お感じくださいますよう。ここだけの話、DVD 制作で原価は跳ね上がっています。なんとか税込みで 3,000 円未満の定価にしたという苦勞を感じ取っていただければ幸甚です。

長々と駄文を並べてしまいました。4 ページもいただいて誠に申し訳ありません。最後に、松本先生が本書にお書きになった一文 (p.22) を引用させていただきますことで、シメのご挨拶に代えさせていただきます。

本書が、向学心、知的好奇心にあふれた若い人たちが物事に疑問を持ち、その答えを自分で考える一助になればと思います。

